

H 2 9 仕事納め式

職員のみなさん、1年間どうもお疲れ様でした。

今年は、6月に市長選挙が行われ、私が市長として新たに就任させていただくこととなりました。

それに伴い、市政運営上大きく変わることもあれば、これまで通り継続していくことも当然あります。

私自身の考え方については、庁内での打ち合わせ、部長会議、朝の館内放送、各種行事における挨拶、議会での答弁等、様々な機会、様々な媒体を通じ、今後より一層力を入れて伝えていきたいと考えていますが、今日は、少し長いスパンで見た行政の役割について話をさせていただきます。

戦後、日本における高度成長が始まったのが、1950年代の中頃であると言われます。それまでの時代においては、最低限必要な生活水準に対し、行政がカバーし切れていなかったため、地域の中で営まれていた相互扶助の仕組みがそれを補っていました。

ところが、高度経済成長期に入ると、市場が拡大し、人口も大幅に増えました。税収は、最低限必要な生活水準をカバーする域を超え、余ったという語弊があるかもしれませんが、その分の予算をどう使うかと

ということが課題となりました。その使い道の典型的な例が、採算性の低いハコモノの整備です。当時は、そういったハコモノの整備が地域の活性化に繋がり、住民のみなさんにも喜ばれると、多くの自治体の本気で考えていたのだろうと思います。ハード面に限らず、行政サービスが至れり尽くせりになってきたのも、この時期からです。

しかし、今の時代は違います。大幅な経済成長が見込めず、人口もさらに減少していくため、税収の伸びもそれほど期待はできません。従って、高度経済成長期に膨れ上がった、行政が担っている最低限必要な生活水準を超える部分というものがどんどん小さくなっていきます。

簡単にいえば、行政サービスを切り詰めるとともに、最低限必要な水準を超える部分については、住民のみなさん自身にも担っていただく時代になっていくということです。

理屈としてはそういうわけではありますが、そのために必要なことは、市民との関係を構築していく対話力であり、もっと端的に言えば、「伝える」ことよりも「伝わる」ことを重視する姿勢です。

地域住民のみなさんの心がどこにあり、それぞれの施策によってどんな影響を受けるか。理屈だけで物事を決めるのではなく、心の通った市政運営を進めてほしいと強く願いますし、PFI事業における大きな反省点もそこにあるように思います。

そして、行政機関と市民との関係が、受益者と提供者という構図に留まるのではなく、福祉、防犯、社会教育等、様々な場面における市民参加を進めていく中で、お金よりも頭と体、知恵と工夫によって、市民と一緒に、これからの西尾のまちづくりを進めてください。それが、「チーム西尾市」の言わんとすることです。

そのためにも、心身ともに健康であることが何より大事でありますので、年末年始でしっかりリフレッシュして英気を養い、年明けにはまた元気な顔を見せていただければと思います。

それではみなさん、良いお年をお迎えください。